日本気象学会1999年度春季大会ベストポスター賞の受賞者決まる

講演企画委員会によるベストポスター賞の贈呈は今年で3年目となりました．この企画は，ポスター発表が普及する以前の状態からポスター発表中心の大会形式に移行する際に，お手本となるポスターを紹介し，発表内容の向上と討論の活性化を促すことで，大会参加者数を増加させることを目標としていました．この目標に従い，ベストポスター賞の評価基準は以下の点におかれました．

(1) ユニークで印象に残り苦労のあとが伺えるようなポスターを表彰する．
(2) 他分野の者にも分かり易いお手本となるようなポスターを表彰する．
(3) 学術的な内容も評価の対象となるが，学会賞や山本・正野論文賞のように学術水準を重点的に評価するものでない．

選考委員が短時間にすべてのポスターを見て評価するのは実際問題不可能なので，1次選考は大会参加者全員にお願いしてあります．受付で大会参加者には投票用紙（3日分）が手渡され，無記名投票により大会3日間を通して連日上位2件ずつ計6件のポスターが受賞候補作品としてノミネートされました．(1日目：伊藤昭彦他，紫村孝嗣他，2日目：内藤陽子他，吉野純他，3日目：渡辺雅浩他，加藤雅也他．)伊藤会員は第1回受賞者であり，多くの票を集め今期で3回連続のノミネートとなりました．また，加藤会員はPCによる動画を添えての発表でしたが，PCの持ち込みの件数は減少傾向にあるようです．今回は大きな用紙1枚にカラフルに内容をまとめたポスターに注目が集まりました．

最終選考は全講演企画委員と本大会及び次期大会実行委員会の代表からなるベストポスター賞選考委員会により行なわれました．選考委員は6件のポスターを再度見直し，無記名投票によりベストポスター賞1件を選出しました．開票の結果，第3回日本気象学会ベストポスター賞には京都大学理学部の内藤陽子他による作品が選ばれました(写真1)．内藤会員には住講演

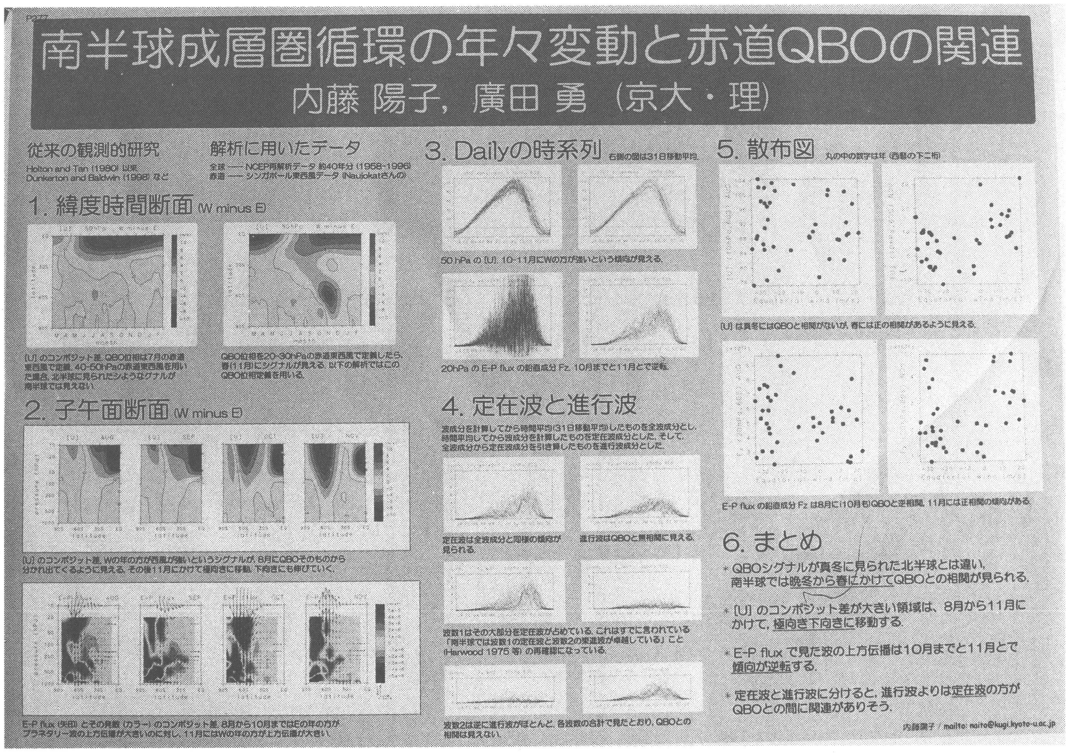

写真1　受賞作品となったポスター

企画委員長から賞状，記念品，および副賞として次期大会懇親会招待券の目録が贈呈され，ノミネートされた6名の会員（写真2）には，記念品として気象学会特製のマグカップが贈呈されました（デザイン：楠研一会員）．今回はさらに，まとまりの点で評価が高かった紫村会員の作品に対して，ベストポスター賞特別賞が贈呈されました．ベストポスター賞受賞作品（写真1）は，お手本として全会員に参考にしてもらう一方，講演企画の責任で次期大会（福岡大会）においても掲示していただくことになっています．

一般発表をポスター形式に移行して3年目の今期，ポスター発表は十分に定着しその長所短所を各会員が評価できる段階になりました．問題点としては，小数の発表しか聞けない，発表者が他の発表を見れないという意見や，1分間概要紹介に賛否両論の意見があるようです．今期は一部の要望に応えて5分間の一般口頭発表を例外的に認めました．ポスター発表の持つ気楽さと充分な議論ができることの一方で，未完成で安易な発表が増えているとの可能性も否めません．この点は今後の検討課題として改善を図る必要があります．

写真2　ベストポスター賞の受賞式

（講演企画委員会）

会員の広場

ベストポスター賞を受賞して

このたびはベストポスター賞に選んでいただきまして，とてもありがたく思っています．発表内容は，私が修士の頃からずっと取り組んでいる成層圏循環の年々変動と赤道QBOの関連について，今回は特に南半球の場合の解析結果を示したものでした．まだまとまった成果と言えるものではなく，とりあえず中間報告をして皆様からアドバイスをいただこうという段階のものでしたから，正直に言えば，内容だけで賞をいただけるレベルにはなかったと思います．賞をいただいた理由として思いあたる点の1つに，AOプリンターを利用してポスターを1枚の紙に作成したということがあります．他のノミネート作品にも，大きな用紙を使用したものがありました．こうするとレイアウトが自由になるというメリットがあります．大きな領域にレイアウトして分割印刷し，それを後でつなぎ合わせる場合も，もちろん自由なレイアウトは可能ですが，大きな用紙を使うことで，後からつなぎ合わせる手間が省け，見た目にもすっきりしました．もっとも，高価な道具ですし，どこでも使えるというわけにはいかないかもしれません．私の場合は，つい最近導入されたプリンターを試用させてもらえるという幸運に恵まれたおかげで，今回のようなポスターを作成することができました．

私が工夫した点としては他に，字をなるべく大きくしたということがあります．小さい字でたくさん書き込まれていては読みづらいだろうと思ったからです．図も大きくしたため，書き込める字数は非常に少なくなってしまいました．そのために犠牲になった部分もあります．研究の背景はほとんど何も書いていないに等しい状態でしたし，図のキャプションもなく，代わりにその図から見て取れる特徴を一言ずつ添えただけでした．あとは口頭で説明すればいいや，というわけです．この点では，これまでに受賞された方の「口頭説明がなくても内容が理解できるように」という路線とは逆を行くことになりました．学術的な研究発表に本来必要とされる情報までおろそかにしてしまった感

© 1999　日本気象学会